

発達障害と非行

～その正しい理解と支援のために～

京都少年鑑別所 定本ゆきこ

少年鑑別所で自閉症スペクトラム と出会う

- 少年鑑別所ではH9年頃よりちらほらと
- 「普通の」非行少年たちとは違う「変な」少年たち
- 黒い髪で眼鏡をかけている
- 基本的に、真面目に学校に通っている
- それまでに非行歴がない
- ちょっと変わった非行動機と非行態様



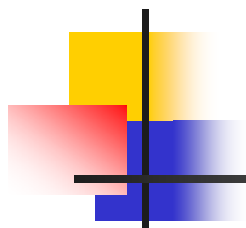
自閉症スペクトラム障害と非行

- 殆んどが未診断, 未治療だった
- それまでの経過の中で, 誤解や無理解のために多くの傷を受けている
 - ・家庭での無理解
 - ・学校での不適応(いじめ, 教師の無理解)
- 良好なスキルの獲得に失敗あるいは不十分
- 深刻な不適応感, あるいはうつや強迫など二次的症状の存在
- 悪性のこだわりの存在



非行を鑑別するための3つの視点

- (1) 子どもは周囲の環境の影響を受けやすい
- (2) これまでの時の流れの中で理解する
- (3) 子どもそのものを重層的に把握する



出生

乳兒期

幼兒期

學童期

思春期
青年期





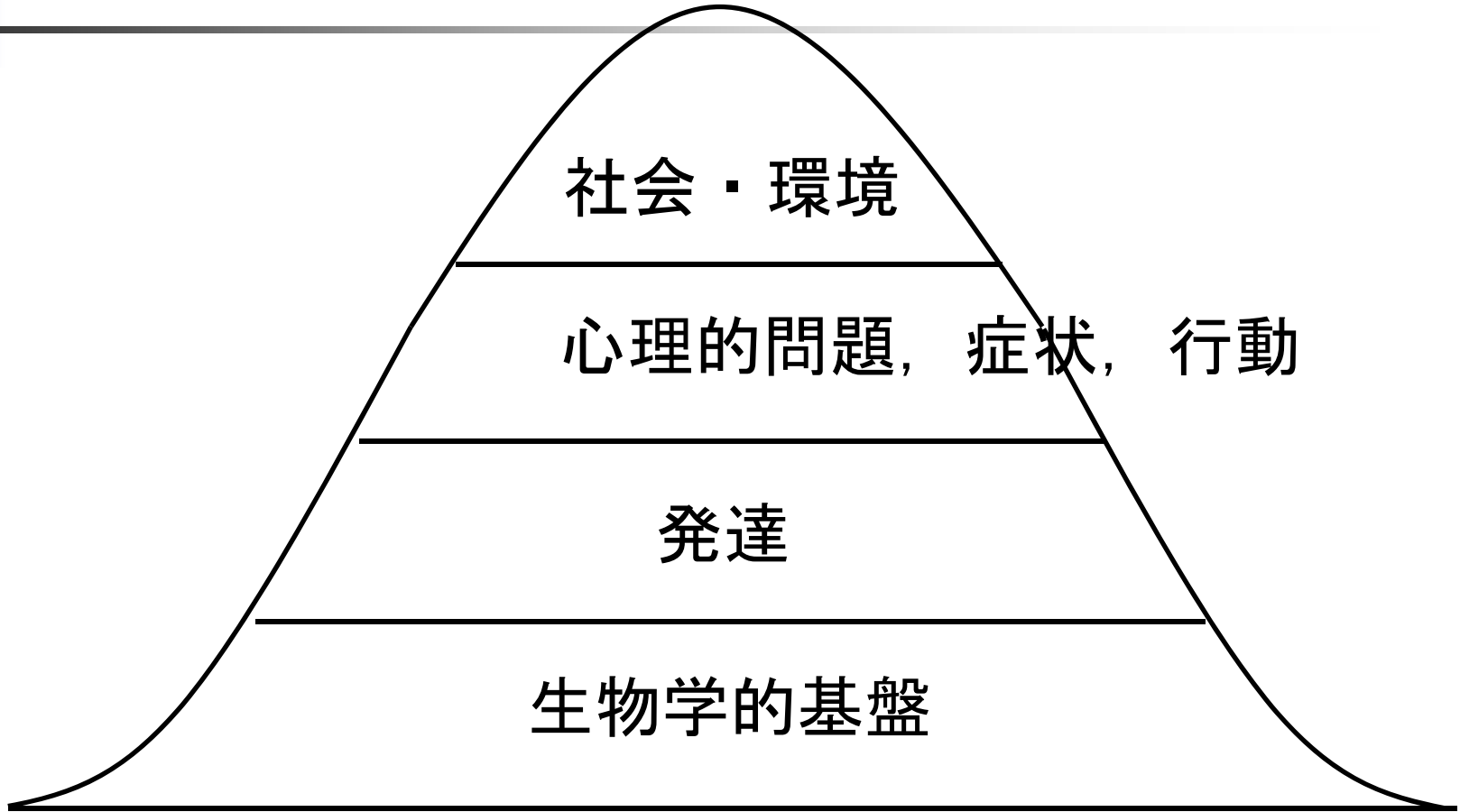
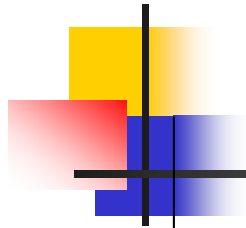
子どもは，社会的存在として 発達していく

- 全ての子どもは日々，発達している。
- 発達障害があろうがなかろうが
- 次第に社会的存在としてのスキルや在り方を身に付けていく
- 発達していく過程で，獲得していくものに影響を与えやすい因子としての理解



ライフサイクルごとの発達課題

- 乳児期・・基本的信頼vs不信
- 幼児期・・自律性vs恥, 疑惑
- 学童期・・積極性vs罪悪感
生産性vs劣等感
- 青年期・・同一性vs同一性拡散
- 成人期・・親密さvs孤独
生殖性vs停滞





発達障害と二次障害

- 誰にとっても、成長、発達していく過程がある
- 子ども側の資質的弱さに気づき、その上で、育ち育ち合ってきた経過を想像してみる
- 時期ごと、ライフサイクルごとの課題につまづいてはいないだろうか

幼児期，学童早期に陥りやすい問題

- 育てにくい子，分かりにくい子であるために，親の育児負担，育児不安が高くなりやすい
- 軽度であるゆえに障害の存在に気付かれにくい



- 虐待や不適切な養育を受けることになりやすい

早期診断が大切である(早期療育は有効)

*やりにくさの原因と対処の方向性が分かれば，随分
落ち着くもの*

学童期以降に見られやすい問題



集団，社会生活における不適応がより目立つ

- 1) 他の子と一緒に行動することができない、先生の指示に従わない、友だちが出来ない、孤立しやすい、身勝手（に見える）行動をする、こだわりとパニック
- 2) いじめの対象になりやすい
不適切な対応や教育的指導のため、事態が
いっそう悪化することがある



二次障害の有無や程度は、 環境との相互関係による

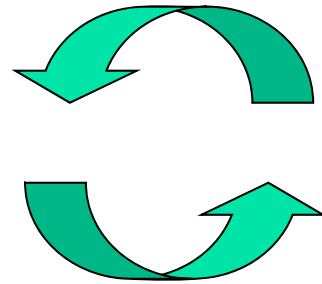
- 家庭での理解と保護の程度
過度の養育熱心、あるいは放任
どちらも結果的に好ましくない
- 学校での理解と発達促進的な教育環境の有無
叱責や否定的評価が繰り返されていないか
良いところを褒められているか
いじめや孤立状況に陥っていないか



日々の発達に影響を与えるもの

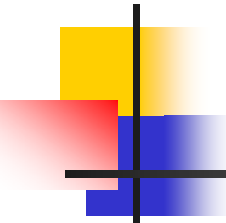
子どもの持って生まれた資質

(相互作用)



子どもを巡る生活環境

家庭, 学校, 地域, 社会



子どもと環境との間で見られる 正のループと負のループ

- 子どもの発達は、資質と環境の相互的循環的営みの中で、なりたっていくもの
- 一方的、直線的なものではない
- 「親あつての子ども、子どもあつての親」どちらか一方の問題としてのみ捉えるのは本質的ではない
- 望ましい循環（正のループ）と望ましくない循環（負のループ）がある

正のループ

- 障害特性から適応的な行動へ

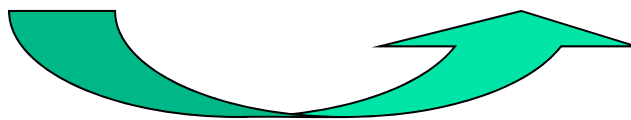


- 周囲の肯定的な評価と好意的な態度

- 前向きで意欲的な構え



- 良好な自己評価と自己尊重感
- 周囲への信頼と受容されている感覚



負のループ

- 障害特性からくる適応的でない行動

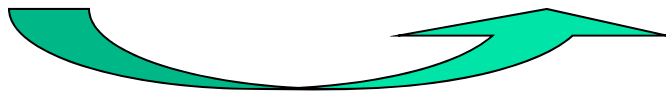


- 周囲の否定的な評価
叱責, 体罰

- 前向きになれない, 自暴自棄的, 抑うつ的, 「どうせ自分なんか」



- 低い自己評価と自己像
- 周囲への不信感と被害感





負のループを循環する中から 二次障害が

- 負のループとは、そのまま子どもにとっての虐待、不適切な養育へとつながる
- 様々な症状（脱毛、爪噛み、睡眠障害、摂食障害、不安、抑うつetc.）
- 問題行動（万引き、ちょっとした暴力、わがまま）
- 不登校、ひきこもり



二次的症狀をどうとらえるか

- 二次的症狀や問題行動の示される意味を正しく察し気付かないと、三次的障害につながってしまう
- 低い自己像、不登校の長期化、ひきこもり、低学力、不安の深刻化
- 負のループの中にとると、問題は積み重なり深まっていく



正のループに変えることが肝心

- ループ，循環は，流れでありそのままでも力
- 「正」すなわち望ましい形のループに変換することができれば，全てが相互的，循環的に良い方へ変わっていく
- 周囲（親）の方も，楽で，明るい気持ちで過ごせる営みになる
- 子どもが救われれば親も救われる，親が救われれば子どもも救われる（これを相即的關係と言います）



負のループから正のループへ

- 子どもが示す適応的でない行動や症状の理由を知る
→子どもを正しく「知る」
- 子どもに対する見方, 子どもが示す行動の受け取り方が変わる
→子どもへの「感情」が変わる
- おのずと子どもにとって望ましい態度や対応が示されてくる
→こちらが意識的, 意図的に変わる

負のループ(親側)

- 症状, 問題行動の増加



- どうしてできないの, なぜ分からないの, と疑問, 不安
- 育児負担感の増大

- 強すぎるしつけ, 叱責, 体罰
- 愛着忌避, 接触の減少



- 子どもがかわいく思えない
- 親として自信が持てない



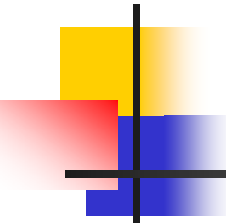
正のループ（親側）

- 症状，問題行動の改善
- 適応的な行動

- 子どもの特性に合った対応やしつけ
- 接触や愛着が増す

- 症状の原因や問題行動の意味が分かる
- これまでのことに合点がいき先の見通しがつく

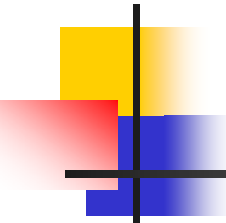
- 子どもがいじらしく思え，かわいくなる
- 自分のせいだけではなかったと分かり，自信をとりもどす



負のループから正のループへ (支援者の立場から)

- 効果的な介入は、子どもに対する正しい理解を進めるための援助

正しく知ることはよりよく愛することにつながる



負のループから正のループへ (支援者の立場から)

- 親のあり方を責めるだけでは何も解決しない
→ 始めから愛情で解決しようとしなない
- 親の根気や忍耐ばかりを強要しない
→ 親としての成長や成熟も循環的
最初から理想通りはいかない

なかなか結果が見えない時も共にいて、小さなことでも共に喜ぶ支援者でいきましょう



思春期、青年期に問題となりやすいこと

- 未診断、未治療のケースで、この時期に問題が顕在化することがある
- それまでの周囲の誤解と適切でなかった対応が積み重なり、問題が理解されないままにストレスが蓄積されている
- 二次的, 三次的症状と言える



思春期心性について

- 思春期は第二性徴から始まる
- 心身の発育や発達アンバランスな時期
- 「自分」が一番の関心事。自己像の問題。
- 敏感さ、極端さ、不安
 - 子どもたちは非常に依存的に
- 一方で、思考力、判断力がつくため自己主張ができ、大人に対して反発するようになる

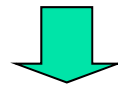


思春期における症状形成

- 大人や社会への「依存」と「反発」
- それまでの生育歴の中で積み残している矛盾、置き去りにしてきた問題などが、思春期に激しいエネルギーを持って噴出する
- 症状の出方は、子どもによって違う

思春期の子どもたちへの支援

- 依存をしっかりと「受け止める」
- 反発や自己主張をしっかりと「受け止める」
- そして、自分探しの旅に付き添い、見守り、できることはしてあげる



- 自己同一性の獲得
 - ～「わたしはわたしである」
 - 「わたしはわたしでいい」



思春期、青年期に問題となりやすいこと

- 未診断、未治療のケースで、この時期に問題が顕在化することがある
- それまでの周囲の誤解と適切でなかった対応が積み重なり、問題が理解されないままにストレスが蓄積されている
- 二次的, 三次的症状と言える



ひきずっている外傷体験

- 現実場面での失敗体験が積み重なっており、過去の嫌な記憶からなかなか抜け出せない
- ソーシャルコミュニケーションスキルの拙さのために、対人関係でトラブルを起こしやすい。傷つき体験ばかりが重なり癒されたことがない
- 固執性が強いいため、被害感がいつまでも続く



抱えている問題

- 自分のことを見つめるようになり、劣等感を感じたり自分を責めたり低い自己像に悩んだりする
- 周囲の人々や社会との間に大きな距離を感じている
- 青年期，成人期における新たな課題をどう乗り越えていくか（進路、就労，家庭生活，子育てなど）

具体的な二次的問題，症状として

- 不登校
- 職場不適應
- ひきこもり
- 家庭内不適應（夫婦関係、子育て）
- 精神科的問題
 - ・・気分障害（抑うつ）、不安性障害、精神病症状
- 違法行為
- 性的問題



違法行為をめぐって

- PDDの場合、枠に従う構えが強く真面目なので、犯罪率は一般に比べて決して高くない
- 動機や態様が一般には不可解であることが多い
- いくつかの原因が重なっている（発達障害がそのまま違法行為につながるわけではない）



違法行為に至る動因とは

- 自分の行動が他人に及ぼす影響を理解できない
- 他人の表情や、周囲の状況の意味が理解できない
- (悪性の)こだわり行動
- 他の人に利用されやすい
- 認知の独特な歪みの存在
- ストレスや怒りの蓄積
- 環境の変化、困難に直面したときの混乱やパニック

自閉症圏における非行化のリスク因子



- 男子であること
- 虐待的な家庭環境、母親的な機能の欠如
- 学校での不適応(いじめ、孤立)
- 学校以外でも居場所がなく、孤立している
- 未診断で、相応の支援、配慮を受けてない
- 対人スキルが未発達
- 悪性のこだわり
- 対人恐怖、抑うつ、強迫など症状の存在

発達障害と非行

- 発達障害だけが、非行の原因ではない。
- 様々な要因が重なり合って、逸脱行為が起こる。
- しかし、認知の歪みは如何ともしがたい重要な動因の一つである。

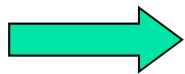


- なるべく早い時期に診断し、特性が周囲に理解されることが望ましい。
- 早い時期より、配慮と支援の中で、スキルを獲得していくことが望ましい。
- なるべく和やかな人間関係の中で平和的なモデルを見ながら育つことが望ましい。

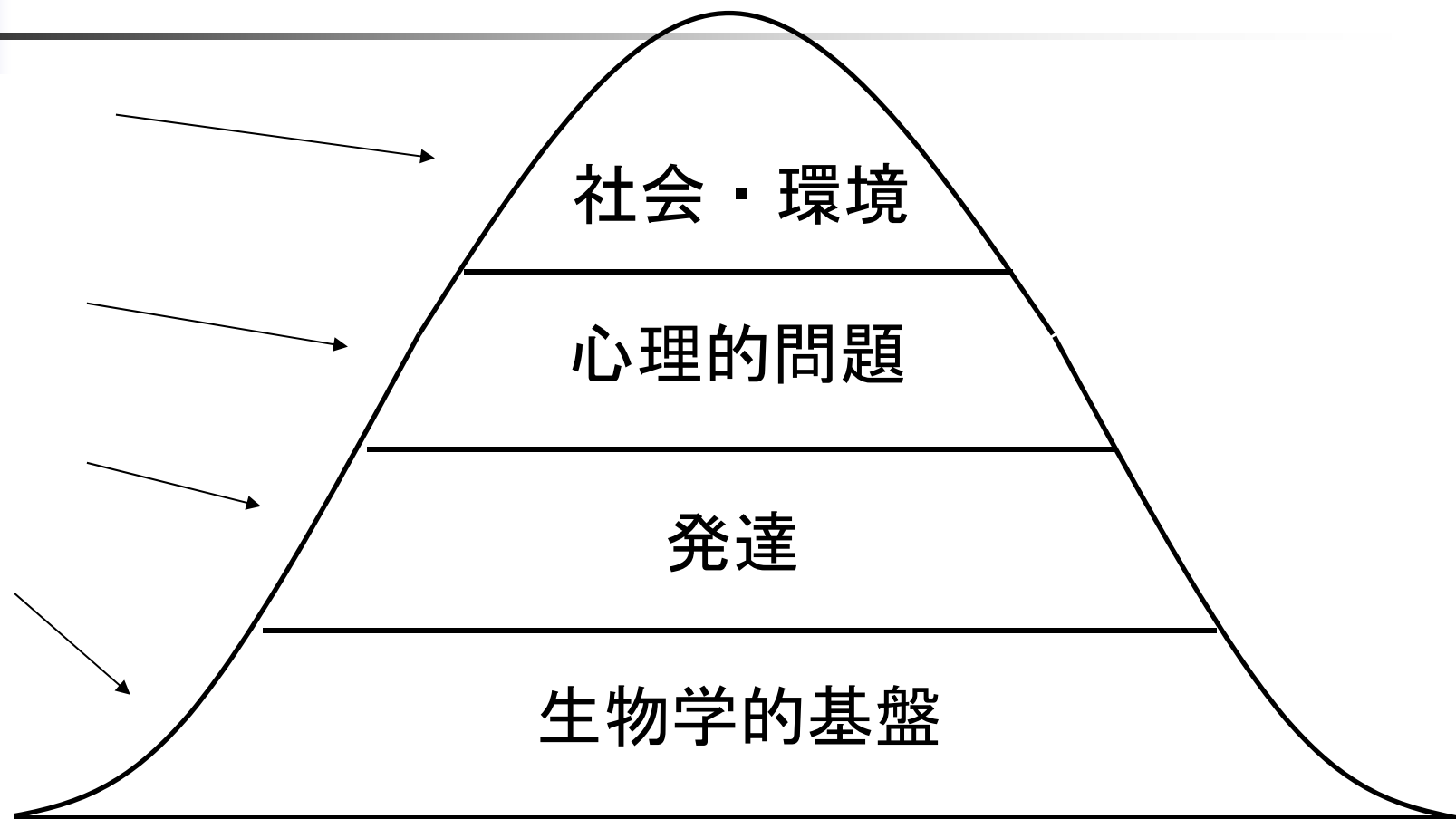
行動改善には重層的な視点が必要


- 環境調整 → 家庭の理解と適切な対応、学校や職場での理解と支援を求める。年齢相応の居場所を見つける。
- 発達を促進する教育，働きかけ → 対人スキルの向上を図る。
- 薬物なども使い、症状を抑える。一日一日症状のない日を重ねる。

これらは相互に関連している。効果的に
つなぎ合わせ，総合的に改善を図る

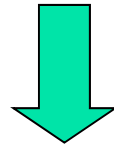


これらは相互に関連している。
効果的につなぎ合わせ、総合的に改善を図る





非行は、社会との関係のとり方の一つの失敗の形である



背景にある環境要因と少年自身の資質を正確に見極めることが、行動改善のための第一歩

少年の理解と、支援、教育の指針のためにこそ、医学的診断が生かされるべきである



違法行為への対処、予防

- 小さなサインを示した時は、背景にある苦しさ、生きづらさの存在を想定して、本人の言葉に耳を傾ける
- 生きづらさを受け止め、無理をしないように告げながら、今後の生活の送り方を共に考える
- ストレスの強い状況からは早目に回避させる
- 抑うつや不安などの症状を早目に治療する
- 違法行為の後には、大目に見ないで一般と同じように厳しく処分してもらうことでことの重大性を認識させる



違法行為の予防のためにできること


- 早期診断されるに越したことはない。早い時期に障害特性を知り、周囲が正しい理解をし、適切な支援をしていくことに尽きる。
- 適応的な行動をとれるように、日常の中でソーシャル・スキル・トレーニング
- 社会的な行動に必要な基本的ルールを、早い時期から一貫して教え込む
- こだわりについては、早期から適応的にコントロールしておく
- 年齢に応じた居場所を持っていること
- 家庭や社会の中での役割意識、人との良好なつながりを持っていること



望ましい支援のあり方

- 障害ゆえの生きにくさと、そこから来る苦痛を良く理解していること。それが援助の第一歩。
- 構造化や視覚的支援など、その場での具体的な支援。
- 必要に応じた巧みな相談と仲立ち、時には指示。
- 身近なサポート・システムを築く。
- 好意的な目で見て、タイミングを逃さずに認めてあげる、誉めること。

一貫し、多様性のある支援

- 
- 診断が付き障害特性が理解されていれば、将来予測されるリスクに対して、予防的、保護的に対応することができる
 - ライフサイクルを通じた一貫した支援があれば、障害も一つの個性として適応していくことが可能
 - 思春期青年期以降は、親以外の第三者の支援者を開発しておくことが大切
 - 身近なサポートシステムを作っていくこと
(就労, 子育て, 余暇活動など)
 - 社会の行政施策, 福祉的サービスを大いに活用すること
 - 必要に応じて医療的支援も活用するべきである



家族への支援の大切さ

- 家族は、日常的なサポートシステムを作ってくれる最も大切な人たちである。
- 家族もまた、抑うつやパニック症状など、ストレスからの症状が出る場合がある。
- 家族もまた、支援を必要としている人たちであると認識すべきである。
- 家族の負担と不安に配慮した介入が求められる。孤立させてはいけない。
- 親族にも発達障害の傾向が認められる場合も少なくない。家族全体を包括的に理解し多角的にサポートすることが求められる。

まとめ

- 診断が付き障害特性が理解されていれば、将来予測されるリスクに対して、予防的、保護的に対応することができる
- 子どもから大人に移り変わっていくデリケートな時期である思春期。その時期のリスクの一つが非行である。
- まずまずの自己像を持ち、社会との良好な関係を保ちながら思春期を迎えさせてあげられるように、幼児期・学童期から見通しを持って支援していくことが大切。
- 学校生活は、社会生活に出る前のまたとない訓練の場。学力、体力、対人コミュニケーション、社会的ルール理解など、様々なスキルを伸ばすことを念頭に。連続性を持って。
- 分かりやすい行動枠、具体的で達成可能な課題設定。そしてほめることで力が付いていき、適応的な行動も可能になっていく。
- より良き大人のモデルに接することの大切さ。